

後記

○本号は、五名の専任教員および大学院生・大学院修了生（本学非常勤講師）による、論考ならびに資料翻刻・解題で構成される。実際にはさらに数名の執筆が予定されていたのだが、編集の都合上、かなわぬこととなった。編集の都合というのは、昨今の状況に鑑みた経費削減であり、頁数の上限目安の設定である。教育研究を取り巻く環境は厳しさを増すばかりだが、『駒澤國文』が今後とも注目を集める論集たるべく、努力を重ねたい。

○この四月より高橋文二先生の後任として、湯淺幸代先生をお迎えした。『源氏物語』をはじめとする平安文学研究における新進気鋭の研究者として高い評価を得ておられ、本号にもご論を寄せていただいた。ご研究のみならず学科運営・教育面においても国文学科の将来を力強く支える新鮮なスタッフとして加わっていただけなのは、誠に喜ばしいことである。

○例年行われる国文学大会の内容は、彙報欄にも簡単な報告を掲載しているが、今年度は東京大学大学院教授の多田一臣先生をお招きして御講演をしていただいた。古代日本人の時間意識をめぐっての聴衆を魅了するお話をいただき、感謝申し上げます。

(K)

編集委員 林 達也

勝原 晴希

湯淺 幸代